

安心して登校できる適応支援・別室支援について

不登校児童・生徒の状況

当該児童は、クラスメイトとの不和から不登校状態となり、解決に向けた話し合いを重ねる中で、保護者に校内適応支援員の運用が始まったことを伝え、登校に向けての対応を始めた。校内適応支援員による別室での支援を通して、少しずつ登校できる日数・時間数が増え、不登校状態の解消に向かっている。

具体的な取組

「個に応じた柔軟な対応」

学校から時間を指定することではなく、当該児童の状況に合わせて別室での支援を行った。また、学級の授業に参加する際も、当該児童や保護者のニーズを聞き取り、必要に応じて教室に付き添うことで、徐々に学級での授業参加も増やすことができるようになった。

「校内体制の整備」

現状不登校状態ではないが、支援をすることで不登校を未然防止できる児童に対しても、支援員による見守りや学習支援を行った。そのため、不登校対策担当教員と特別支援教育コーディネーターとの連携を強め、各々を窓口にすることで、相談しやすい体制を整えた。

「校内委員会への参加」

校内適応支援員も校内委員会に参加し、支援を必要とする児童や課題のある児童の状況を共通理解することで不登校の未然防止につなげた。



「不登校児童への周知・啓発」

現在不登校の児童や保護者に対して、校内適応支援員の取組について紹介し、登校に向けた足掛かりにした。現段階では登校再開に至っていないが、制度や校内適応支援員への関心が高まり、別室での支援に向けての話し合いを継続している。

成果

当初不登校状態だった児童は、別室での支援を経て在校時間を増やすことができ、部分的には支援がなくても自身の教室で学習できるようになった。また、多くの児童の様子を共有することができ、不登校の未然防止に向けて関わりを増やすことができた。

課題

不登校状態が改善されない児童への対応や、複数の児童への対応の仕方について、さらに体制を整えていく必要がある。

校内別室（ステップ教室）での過ごし方について

不登校児童・生徒の状況

・中学校 3 年生の生徒においては、市の教育支援センターより巡回する指導員と学級担任、校内適応支援員が連携して受験に係る指導を実施しており、志望動機書、作文の練習をしている。下校時刻の 1 時間程前に登校し通常学級の生徒を待って一緒に下校する生徒もあり、当該生徒は教室までプリントを取りに行けるようになった。

具体的な取組

・校内別室（ステップ教室）に登校した際は、職員室のホワイトボードに生徒名を記入し、担任及び学年の教員が確認できるようにした。

・空き時間や休み時間を利用し、担任が生徒の様子を見に来たり、書類など直接渡したりできるようになるなど、担任とのつながりがもてるようになった。

・市では定期的に不登校対策委員会を開催し市内小中学校不登校対策委員、教員等が集まり研修を行っている。

・市内他校の校内別室の視察を行った。日報を見せてもらい、どのように過ごしているのかについては、登下校時の出入り口など見学した。他校との情報交換を行い自校での参考とした。

・毎週の出席状況(滞在時間含む)を学年ごとに記入し確認できるようにした。

・月別の出席状況(滞在時間含む)、連絡事項(何をしたか、生徒の様子)を記入し、保護者宛てにお便りを出した。

・担任、学年、特別支援教育コーディネーター、適応支援員が情報共有できるようにしている。



・各自、自習教材を持参し学習の場になっているが、個々の生徒が自由に過ごせるようにしている。

・学習より読書をする生徒が多く、司書と相談し学校図書館を利用。学級文庫の貸し出しを行う。

・生徒たちと教室の雰囲気をよくするため壁面飾り作りを行った。



成果

教室以外の居場所ができたことにより、全く登校できなかった生徒が短時間、週 1 回のペースでも登校できるようになった。教員や同じ状況の生徒同士がつながれる場になった。

課題

3 階で陽射しや見晴らしも良く明るい環境だが昇降口まで遠い。受験勉強をしている生徒がいるため卓球やカードゲームはできない。

不登校生徒支援について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒のうち 1 人は、小学生の時から不登校状態が継続している。不登校の要因について保護者からの聞き取りでは「登校することに価値を見いだしていないこと」とのことである。

具体的な取組

不登校担当教員を中心に、アセスメントに重点を置き、ケース会議を実施。担任、保護者、本人による三者面談の内容や巡回心理士による生徒観察の様子等の情報を収集・分析・共有し、方向性を確認した。

週 1 回の校内委員会では、生徒の状況や変化を共有し、生徒との関わり方において、不登校担当教員や学年担当教員、養護教諭等が共通した対応ができるよう調整している。

本人に別室登校をすすめることとした。

別室登校の際は、昼頃に登校し、校内適応支援員と昼食を共にするとともに、午後少し学習して下校、というルーティンを構築するような呼びかけ・仕掛けをつくっている。



本人の体調に合わせながら、もう少し早い時間に登校ができるよう、気持ちに寄り添いながら、自己肯定感を高めさせること、集団行動でコミュニケーションを図ることができるように、学年担当教員と校内適応支援員との連携を大切にして、組織的に支援を行っている。

成果

別室登校の際のルーティンができあがり、週 1 回程度であった登校状況が、週 3 ～ 4 回、登校できるようになった。

課題

他の生徒と同じ教室にすることができない生徒への対応（複数教室の用意が必要性、校内適応支援員対応方法の工夫など）

校内別室（あっとルーム）の取組について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒の1名はゲームの影響からか、昼夜逆転の生活となり、登校時間には寝ていることが多い。一人親家庭であり、保護者が仕事に出ている間は、ほとんど寝ている。小学校から欠席が続き、学力不振であるとともに自己肯定感が低い状況である。

具体的な取組

○校内別室（あっとルーム）の開設

校内に「あっとルーム」と名付けた別室登校用の教室を設置し、校内適応支援員を配置した。このことにより不登校状態にある生徒を連日校内で受け入れる体制が整った。登校時間や在校時間に幅をもたせることで、登校できる生徒が増加した。

○校内別室で学力を補う

校内別室では、本人の学力に合わせて段階的に学習を補うようにしている。別室での学習支援は、生徒にとって安心感があり、本人に自信をつけさせるには良い環境である。当日学習した内容は、不登校加配教員を通じて各教科に伝えている。

○通室記録と担任との連携

生徒は別室登校した際、その日の目標や活動内容等を「通室ノート」に記録する。「通室ノート」は、校内適応支援員から不登校加配教員へ、その後、不登校加配教員から担任へ渡す流れとなっている。担任は、「通室ノート」にコメントを残し、生徒とのつながりを大切にしている。本人が目標を立てられないときは、校内適応支援員が本人と一緒に考えるようにしている。

○「心の休憩場所」として

「あっとルーム」は、単に登校を促し、学習する場所という位置づけではなく、「心の休憩場所」としての活用もしている。心身が疲弊して登校した生徒に対しては、単に学習を進めるのではなく、本人の話を聞いたり、こちらから話をしたりといった活動を通して、生徒に安心感を与えるようにしている。



成果

○「あっとルーム」は、登校時間や滞在時間を生徒や保護者と相談しながら決められることから、本人の登校につながりやすいと言った利点がある。また、校外の機関と違って、学校と家庭との連携が取りやすい。実際、この別室を開設したことにより、登校する生徒が増えた。

課題

「あっとルーム」に登校できない生徒もいることから、個々の生徒に対応した、魅力ある学校（教室）づくりを目指す必要がある。

校内別室における不登校生徒への支援の取組について

不登校児童・生徒の状況

昨年度より欠席数が増えている状況や、様々な理由で学校へ登校することができない状況もあり、複数の生徒が校内適応支援員の支援を受けている。また、学校生活のなかで、不安を感じる場面や感情が高ぶってしまった際の一時的なクールダウンの機会となっており、不登校の未然防止にも資している。

具体的な取組

●校内適応支援員の活動の共有の工夫

本校では6月より校内適応支援員の勤務が始まった。学級増により特定の教室を使用せず、放送室の準備室や特別支援学級の空き教室を活用し校内巡回も行っているため配置を可視化（※1）した。また独自に執務記録を作成して回覧している（※2）。

●個別の状況への支援体制の構築

様々な理由で学校や授業に参加できない状況に対し、安心できる居場所づくりを目標としている。

校内適応支援員の執務内容の記録を校内委員会でも取り上げ、必要に応じてSSW や子ども家庭支援センターとの連携につながった事例もある。

●対象家庭への普及・啓発

支援を受けた生徒から「安心して勉強を教えてもらえた」「久しぶりの登校で不安だったが、校門まで迎えに来てくれて安心した」との感想がある。本校では、真に必要とする生徒が確実に利用できるよう、全体に周知せず、不登校生徒の保護者を中心に周知している。



右：勤務の可視化

※1

左：支援員の一日の執務記録と回覧

※2



成果

校内適応支援員の配置により、登校することに不安感がある生徒にとって、学校が安心できる居場所として認知されつつある。わずかな時間であっても校内適応支援員と学習をする生徒が増えつつある。

課題

校内に入ることの難しさがある状況に対し、近隣の公共施設などを活用することを検討したい。

校内別室（ステップルーム）の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、登校渋りなど、不登校傾向が見え始めた生徒や、すでに不登校となっている生徒、学校外支援機関で支援を受けている生徒など、通常の学校生活や在籍学級での学習が困難な生徒であり、校内別室では学習等の支援を行うこととしている。現在は、比較的不登校が長期化していて、学び直しを図っている生徒が多い。

具体的な取組

事例①

医療機関で起立性調節障害と診断され、現在は午前中の登校が困難であるが、午後の開室時には定期的に来室した。その後、少しずつリズムを取り戻し、午前中の開室時にも通室できる日が増えている。学び直しを中心に、学習にも意欲的に取り組んでいる。

事例②

小学校から不登校傾向があり、中学入学後しばらくは登校できたが、1学期後半から再び欠席が増え、校内別室の利用を始めた。学校の課題等を自分のペースで学習し、少しでもできたという実感をもたせることで、自己肯定感が高まるよう支援している。

事例③

入学後から不登校で、市の教育支援センター等を利用していた。3年生となり、上級学校進学に向け、主に作文練習を進めたいということでステップルームの利用を始めた。作文を担当が添削しアドバイスするなど、本人・校内適応支援員・担任教員との連携を図っている。

事例④

特別支援教室に通室するが在籍学級への行き渋りがある生徒に対し、学び直しを含む学習支援を行っている。特別支援教室専門員等と連携し支援している。



成果

不登校の状況が長く続いていた生徒も、静かに自分のペースで学び直しができる校内別室を利用することで、体調やリズムを整えながら学習の遅れを解消することができている。定期的な利用と学校・学年行事をきっかけに在籍学級の活動に一部参加するなど、登校への意欲向上につながっている。

課題

入室基準の明確化及び教員への周知、利用の際の手順簡略化等により、より一層利用しやすい環境を整える必要がある。

校内別室を活用した不登校生徒の支援について

不登校児童・生徒の状況

「人間関係のつまずき」、「対人関係の不安感が高い」など人間関係の構築が難しく、コミュニケーションが苦手な生徒はそのストレスから、また、学習の遅れから不登校に至っている。さらに、先述の要因が解消に至らなかったこと、関係機関へ接続のミスマッチがあったため、不登校が継続するなどがあり、出現率が高い状況である。

具体的な取組

①アセスメントの充実

不登校担当教員が校内別室利用開始にあたって、不登校生徒と保護者と面談を実施し、詳細な状況把握に基づいた支援計画を作成している。また、校内適応支援員が作成する利用記録簿、及び支援員との面談により逐一状況を把握し、支援に役立てている。

②登校意欲向上に向けて 落ち着いて学習できる ように、パーテーション を設置したり、歓談でき るようにソファセットを 設置したりするなど環境 整備に努めている。また、 校内適応支援員発案によ る登校回数に応じて、手芸品をプレゼン トすることで登校意欲を高めている。



③ボランティア活動

市のボランティアセンターと連携し、不登校生徒の自己肯定感、自尊感情を高めるため、ボランティア活動に取り組んでいる。(写真は、ボランティアセンター主催の催事用横断幕作成の様子)



④映画観賞会

長野県上田市での取組にヒントを得て、不登校生徒の心に迫り、感動を通した豊かな心の醸成を図ることを目的に月1回の映画観賞会を行っている。上映作品としては、世界の広さや価値観の多様性を感じられる作品を選択している。

成果

関係機関につながっていない生徒を昨年度の6名から2名に減少させることができた。また、校内別室を利用する生徒が16名、週2日以上利用する生徒が7名となるなど、校内の居場所として機能している。

課題

校内別室へ登校できる生徒は増加しているが、短い時間であっても授業参加には至っていないことが課題である。

不登校対策としての別室での支援について

不登校児童・生徒の状況

支援の対象生徒は、中学校 2 年生 2 人と中学校 3 年生 1 人であり、共通して集団行動に苦痛を感じる傾向がある。登校の意思はあるものの、在籍学級に入ることができずに不登校となった。現在は「週 1 日午前中まで」「毎日 1 時間半まで」「午後まで」など、それぞれの状況に応じて別室登校し、自主学习等に励んでいる。

具体的な取組

【居場所づくり】

今年度は、新型コロナウイルス感染防止対策につき休眠状態の 4 階調理室を利用する。

毎週月～金曜日、1 校時を 9 : 00 開始とし、生徒の状況に応じて午後からの通級や 1 時間単位の利用も認めている。



【校内・専門機関との連携づくり】

担任と教育相談部、S C、校内適応支援員間で情報を共有し、多角的に対応する。校内適応支援員が生徒の自習を見守り、欠席している教科の学習内容については必要に応じて担当教員より補充指導を実施する。また、日常より担任以外の教員や副校長も積極的な声掛けを行う。

【自尊感情（自己存在感）の育成】

大型ホワイトボードを使い、絵や文章で表現することをみんなで自由に楽しむ。どの作品についてもその良さを必ず言葉にして褒める。時に、問題解決や目標達成までの道のりを箇条書きやロジックツリーと一緒に考え、名案については校内で相談し、実現までを支援する。

【部分的な教室復帰のサポート】

どの授業・活動なら抵抗感が少ないかを本人と相談し、仮の時間割を作成する。「最後方の席で」「1 授業だけ」「部活動から」など、スモールステップでの参加を進め、校内適応感を高める。3 年生に対しては 11 月からタブレットを活用し、別室からの授業参加も支援している。

成果

中学校 2 年生の 1 人が別室登校を始めて 3 か月で校内行事や部活動、在籍学級の授業に 1 日 1 ～ 3 科目、参加できるようになった。別室を拠点に在籍学級に移動している。クラスメイトとも会話ができている。進級時に学級に戻ることを目標としている。

課題

来年度以降の場所が未定である。調理室以外の教室の確保および生徒が増えた場合の体制、安全対策などが検討すべき課題である。